

研究業績説明書

法人番号	87	法人名	人間文化研究機構	学部・研究科等番号	1	学部・研究科等名	国立歴史民俗博物館
------	----	-----	----------	-----------	---	----------	-----------

1. 学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準【400字以内】

国立歴史民俗博物館においては、博物館を持つ大学共同利用機関であることを踏まえ、資源・研究・展示の3要素を有機的に連鎖させるとともに学界・社会と共有する「博物館型研究統合」を深化・新展開させ、国内外の研究者・研究機関とのネットワーク形成、日本の歴史と文化に関する総合的研究の拠点として共同研究を実施することを目的とする。第2期中期目標期間において重点課題と定めた「自然科学的な情報に基づく歴史資料の資源化」「東アジアを中心とする国際関係を重視した日本の歴史・文化研究」等を中心に、「博物館型研究統合」の観点に基づき、次の6点を判断基準として研究業績を選定した。学術面として、①研究内容と研究成果の独創性、②自然科学を含む関連諸学との共同による学際性、③研究内容および研究成果の国際性、④研究体制および研究成果の共有性・公開性。社会・経済・文化面として⑤研究成果の社会への寄与、⑥学術的知識の普及。

2. 選定した研究業績

業績番号	細目番号	細目名	研究テーマ 及び 要旨【200字以内】	代表的な研究成果 【最大3つまで】							学術的意義	社会・経済、 文化的意義	判断根拠(第三者による評価結果や客観的指標等) 【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会・経済、 文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して 選定した 研究業績 番号	共同 利用等
				a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)					
				著者・発表者等	タイトル	発表雑誌・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI (付与されている場合)					
1	1303	図書館情報学・人文社会科学情報学	<p>基盤研究「デジタル化された歴史研究情報の高度利用に関する研究」</p> <p>科研基盤研究(B)「超精細画像による博物館資料の高度比較表示方法の検討」とともに、最新のデジタル技術の日本歴史学の研究・展示への応用研究として、館蔵資料DB情報を用いた連想検索手法とその評価、大規模デジタル画像展示手法の検討、音声を表示する電子コンテンツの開発、仮想現実技術に基づく博物館電子コンテンツの利用者インターフェースの検討、複数画像の比較展示のための表示位置補正手法の開発、等を実施した。</p>	(1)	鈴木卓治編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第189集	国立歴史民俗博物館		165頁		2015		<p>【学術的意義】</p> <p>(1)は査読付きの成果報告集で、高度情報検索・大規模デジタル画像処理・デジタル展示技術の歴史研究への適用を図ったものであり、34,000枚に及ぶ写真の分析に大きな威力を発揮する等の成果を挙げ、また歴博開催の7展示に活用され、展示研究を牽引するとともに研究成果発信に寄与した。(2)はスマートフォンを用いた来館者向け情報サービスの提供実験と、アンケートや利用者ログの分析に基づく来館者の傾向を分析し、今後の課題を検討した査読論文で、展示理解の促進のみならず、展示改善に大きな役割を果たした。(3)は科研基盤研究(B)の成果であり、撮影時の原本の伸縮等に起因する表示のずれの補正方法を開発し、実用に耐え得る資料閲覧システムを作り上げて、原本への接近が容易でない正倉院文書研究を進める上での武器となった。この他、2012年には民間企業も含む全国の研究者を集めて画像電子学会画像ミュージアム研究会と共催研究会を開催し、研究成果を学界の共有財産とした。長野大学と共同で実施したデジタル展示実験は、日本刀の精密な3次元画像を再現し、利用者インターフェースの技術検証と改善を進めた。</p> <p>【社会、経済、文化的意義】</p> <p>本研究で開発された諸手法は、歴博企画展示「風景の記録」(2011年)、「洛中洛外図屏風と風俗画」、「楽器は語る」、「行列にみる近世」(2012年)、「中世の古文書」(2013年)、「弥生ってなに?!」「文字がつなぐ」(2014年)において展示に活用され、単なる物品陳列を超えた歴史資料熟覧の機会を来館者に提供し、展示内容のより深い理解に寄与し、さらに韓国国立中央博物館や京都文化博物館等の他機関の展示にシステムが貸し出される等、高い評価を受けた。また歴博エントランスホールにて実施した16日間のデジタル展示実験は、利用者インターフェースの改善による歴史資料へのアクセスの向上に貢献した。</p>	○	
				(2)	Takuzi Suzuki, Fumio Adachi, Yoshitsugu Manabe	Experimentation and Evaluation of a Multimedia Exhibition Information Service Using Visitor-owned Portable Wi-Fi Terminals Suitable for Small-scale Museums	ITE Transactions on Media Technology and Applications	Vol.2 No.3	pp.256-265	2014					
				(3)	安達文夫、鈴木卓治、仁藤敦史、平野清典、米村俊一、徳永幸生	高精細画像を用いた正倉院文書の調査研究支援自在閲覧システム	じんもんこん2013 論文集	Vol.2013 No.4	pp.217-224	2013					
2	2001	文化財科学・博物館学	<p>基盤研究「歴史・考古資料研究における高精度年代論」</p> <p>本研究は年代研究の課題を整理し、その精度向上を目的とした。大気中炭素14濃度の地域的な変動が従来の想定以上に複雑で、全球的な大気循環を考慮する必要性が明らかとなった。δ 18O値による新しい年輪年代法は広葉樹などにも応用でき、気候変動を反映することから大気循環と14C濃度変動を関連づけるプロキシにもなる。「東アジア版」較正曲線の整備とその微細構造の解明に向け、新たな課題とツールが得られた。</p>	(1)	坂本稔編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第196集	国立歴史民俗博物館		162頁		2015		<p>【学術的意義】</p> <p>本研究では名古屋大学等他機関とも協業して日本列島各地や朝鮮半島等における様々な試料の測定を実施し、その成果を査読付研究成果報告書(1)として公表した。これまで年代測定は、研究上の位置づけが曖昧なままで、とすれば結果報告にとどまりがちであったが、本研究による測定技術の向上と較正曲線の整備により、炭素14年代法の精度を格段に向上させ、これまで年代を推定できなかった石碑も、付着物の分析により数十年単位で年代を与えることが可能になった。炭素14年代法で様々なモノ資料(具体例(3)、石碑の塗料に炭素14年代法を適用した初めての例)に高精度の年代を与え、考古学・歴史学的な資料研究と同じ組上に乗せることで、年代研究の方法論を革新し、従来のモノ資料研究を一変させた。特に、文化財建造物の年代研究において炭素14年代法が応用されるようになった(具体例(2))。なお、2013年6月には研究成果の一端を歴博フォーラム「築何年?炭素で調べる民家の年代研究最前線」として公開し、学際的に高く評価された。</p> <p>【社会、経済、文化的意義】</p> <p>埋蔵文化財調査や文化財建造物修理の現場において、炭素14年代法の導入例が増えつつあり、技術的な問い合わせに対して必要な助言を行っている。炭素14年代法の普及により、地方自治体などが年代測定を依頼する件数が増加し、民間の測定機関が年代測定に乗り出すようになった。足利市の鑊阿寺では建築部材の炭素14年代測定を実施し、建築史的な調査とともに本堂が禅宗様初期の様式であることが明らかとなり、その成果などをもって国宝に指定された。その経緯は、歴博フォーラム「築何年?炭素で調べる民家の年代研究最前線」で一般に報告された(2015年に書籍として刊行され、その内容は、『月刊化学』5月号の書評に取り上げられ、自然科学系の学生に勧められる書物として紹介された)。</p>	○	
				(2)	坂本稔、今村峯雄、中尾七重	AMS-14C法による旧土肥家本家住宅・隠居屋住宅の年代	『第12回AMSシンポジウム報告集』日本AMS研究協会		pp.35-36	2010					
				(3)	坂本稔、朽津信明、本多貴之、前原豊	群馬県二宮赤城神社石造宝塔の炭素14年代測定	『日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会		pp.270-271	2010					

業績番号	細目番号	細目名	研究テーマ 及び 要旨【200字以内】	代表的な研究成果 【最大3つまで】							学術的意義	社会、 経済、 文化的意義	判断根拠(第三者による評価結果や客観的指標等) 【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、 文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して 選定した 研究業績 番号	共同利用等
				a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)					
				著者・発表者等	タイトル	発表雑誌・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI (付与されている場合)					
3	2001	文化財科学・博物館学	<p>基盤研究「日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究」</p> <p>本研究は科研基盤研究(B)と連動し、韓国嶺南大学校博物館・釜山大学校博物館等14研究機関との学術交流を踏まえ、韓国嶺南地域出土青銅資料240点の鉛同位体比分析により、従来の中国華中華南産原料との推測が誤りで、実は朝鮮半島産であった可能性を明らかにした。また日本資料として中国地方出土6C末～7C青銅銅鏡を調査し、考古学と自然科学の両面から青銅器生産が国産原料へ切り替わる時期を追究、結果を公表した。</p>	(1) 齋藤努	山元遺跡出土青銅資料の自然科学的分析結果	『山元遺跡—市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』村上市教育委員会		pp.52-56	2013		S	<p>【学術的意義】</p> <p>自然科学と考古学が協業し、左記の要旨及び次の成果を挙げた。(1)は新潟県出土の朝鮮半島三国時代銅製品がほぼ確実に弥生時代製作であることを立証し、「国内最北の弥生青銅器」「驚きの声」と2010年7月25日付新潟日報・読売新聞等で報道、村上歴史文化館等で一般公開され話題を呼んだ。(2)は百済地域出土青銅資料を分析し、韓国における銅や鉛の製錬開始時期に自然科学的視点から検討材料を初めて提示した。韓国国立中央博や公州大等の研究に大きな影響を与え、韓国国立文化財研究所の同位体シンポジウムで招待講演を行った他、中国の機関も含めて視野を拡大した新たな共同研究の企画に結びつけた。(3)は、7世紀中頃の中国地方古墳出土銅鏡の国産原料使用を初めて明らかにした。国産原料使用の新事例として高く評価され、韓国嶺南文化財研究院第61回考古学研究公開講座等で研究代表が招待講演を行った。</p>			
(2) 齋藤努、藤尾慎一郎	日韓青銅製品の鉛同位体比を利用した産地推定の研究	『国立歴史民俗博物館研究報告』	第158集	pp.163-288	2010										
(3) 澤田秀実、齋藤努、長柄毅一、持田大輔	6～7世紀における古墳出土銅鏡の理化学的研究	『アジア鑄造技術史学会概要集』アジア鑄造技術史学会	5号	pp.19-24	2011										
4	3302	日本史	<p>基盤研究「古代における文字文化形成過程の総合的研究」</p> <p>本研究は科研基盤研究(A)とも連動し、韓国の研究機関との学術交流に基づいて、日・中・韓の文字資料を比較検討し、漢字文化が朝鮮半島を経て日本列島に伝来し、中国や半島諸国と交流しつつ発展を遂げ、諸制度や生活・宗教・文化等様々な分野に大きな影響を与えていった過程を明らかにした。これまで国字と考えられてきた字体が朝鮮半島に由来することや帳簿や祈雨信仰などでの半島と列島文化との共通性が新たに確認された。</p>	(1) 小倉慈司代表	国際企画展示「文字がつなぐ—古代の日本列島と朝鮮半島—」	国立歴史民俗博物館			2014.10.15～12.14		SS	<p>【学術的意義】</p> <p>本研究は社会文化形成の基盤としての漢字に注目し、東アジア社会の形成過程について、日中韓の文献史学・考古学、日本語・日本文学等諸分野の主導的研究者を結集して学際的に明らかにした。(3)は論考17本収録の成果論文集(査読付)で、刊行直後に『岩波講座日本歴史』『日本史研究』掲載論文に引用された。また『岩波講座日本歴史』には本研究の成果に基づいたメンバーの論考9本が収められた。さらに韓国の中心的国立研究3機関と恒常的な学術交流関係を築き、日本で初となる3機関による共同開催の(1)を実施し、初公開を含む国内外の様々な古代日韓交流関係資料を学界及び社会に広く紹介した。</p> <p>この展示は『史学雑誌』で(2)と共に取り上げられ「充実した図録」「解説豊富な図録」との極めて高い評価を受け、日本文学界でも『リポート笠間』58の学界時評で紹介された。なお2011年には韓国国立中央博物館特別展「文字、それ以後」に展示協力し、同館開催シンポジウムでメンバー3名が報告して日韓古代文字文化に関する研究成果を披露した。</p> <p>【社会、経済、文化的意義】</p> <p>(1)は成果を社会に広く紹介することを一つの目的としたもので、会期中には講演会・フォーラム(その後、一般向け図書を刊行)等を実施し、NHK・東洋経済日報等のテレビや新聞・雑誌で紹介された他、メンバーによる各地での講演にもつながった。書道界の関心も呼び、『月刊書道界』にて関連特集が組まれた。国際交流の面からも評価され、国際親善団体として130年の歴史をもつ東京倶楽部から助成を受けた。(2)は研究の中間報告として朝日新聞社の後援により2013年に開催した国際シンポジウム(韓国より報告者・パネリスト5名を招致)をもとに刊行した図書で、韓国の最新の研究状況も含めわかりやすく紹介し、4月23日付民団新聞に4000字以上に及ぶ紹介記事が掲載される等、日韓文化交流に大きな役割を果たした。</p>			
(2) 国立歴史民俗博物館・平川南編	『古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』	大修館書店		306頁	2014										
(3) 小倉慈司編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第194集	国立歴史民俗博物館		576頁	2015										

業績番号	細目番号	細目名	研究テーマ 及び 要旨【200字以内】	代表的な研究成果 【最大3つまで】							学術的意義	社会、 経済、 文化的意義	判断根拠(第三者による評価結果や客観的指標等) 【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、 文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して 選定した 研究業績 番号	共同 利用等	
				a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)						
				著者・発表者等	タイトル	発表雑誌・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI (付与されている場合)						
5	3302	日本史	日本関連在外資料の調査研究プロジェクト「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」  19世紀に収集された在外日本関連資料のうち、代表的大規模コレクションの調査を長期的に行い、成果を広く共有するために有効な方法を追究することを目的とする。研究者間の国際ネットワークを強化し、日本史・美術史・地理学・宗教学・国文学等多分野より、ミュンヘン五大陸博物館所蔵シーボルト収集日本コレクションほかライデン大学・カナダ文明博物館等欧米各地の資料を調査・研究し、その成果を展示等多様な手段で公開した。	(1)	国立歴史民俗博物館	シーボルト父子関係資料データベース	データベースレキはく				2016		SS	SS	【学術的意義】 海外2大学を含む28研究機関64名を組織、海外24機関の協力を得て、日本史・民俗学・美術史・地理学・国文学・文化財学・鉱物学等多分野の研究者が協業し、蘭独米等所在19世紀収集在外日本関連資料について初の学際的・大規模調査を実施した。(1)はミュンヘンに所在する約7000点の多種多様な資料からなるシーボルト・コレクションについて、多分野の研究者による初の悉皆調査に基づき、画像つき詳細目録をウェブ公開した。(2)は2014年2月にルール大学ボーフム共催国際シンポジウム(於ドイツ、ルール大学ボーフム)の報告者(日本・ドイツ・スイス)19名の論文を日英2か国語で収録した報告書。その成果は、今後のシーボルト・コレクション研究に大きく寄与するのみならず、在外日本関係資料の活用による新しい日本文化発信モデルを創った。他にYale Association of Japan コレクション所収「古文書張交屏風」の精密な修復・調査により、表具過程の復原に関する新事実の発見等多くの成果を挙げ、その図録はアメリカ図書館協会貴重書・手稿部会の2016年Leab展示賞第3部門を受賞した。	○
				(2)	国立歴史民俗博物館編	『シーボルトが紹介したかった日本—欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために—』	人間文化研究機構		386頁		2015					
				(3)	保谷徹代表	企画展示「ドイツと日本を結ぶもの—日独修好150年の歴史—」	国立歴史民俗博物館				2015.7.7～9.6					
6	3302	日本史	基盤研究「中世の技術と職人に関する総合的研究」  本研究は科研基盤研究(B)とも連動し、日常生活に大転換をもたらした、海外にまで影響を与えた中世の技術変革を、文献・考古・民俗・美術・分析化学等多視点から総合的に捉えた。中世前半の技術変革に基づく安価な漆器や鉄鍋の普及の過程を解明し、また欧州向け輸出漆器の分析により、東南アジア産の漆代用品、中国より伝来したての真鍮生産等の国際色豊かな技術や意匠を日本の工芸技術で統合した姿を明らかにすることができた。	(1)	村木二郎代表	企画展示「時代を作った技—中世の生産革命—」	国立歴史民俗博物館				2013.7.2～9.1		S	S	【学術的意義】 本研究は文献史学・民俗学・美術史学・分析化学等様々な分野の研究者を組織して中世日本、東アジア世界における技術変革と社会への影響を明らかにしたものである。(1)は研究成果の可視化のために国立歴史民俗博物館にて開催した企画展示。人々の生活を支えた普及品の製作や大量生産体制に焦点をあて、豊富な資料を用いて新しい学説を示すとともに、これまで注目されてこなかった多くの新資料を学界に紹介した。展示図録の写真は半分以上が新規撮影であるため、今後の研究の基礎資料となるものであり、『史学雑誌』123-5、『日本考古学年報』66で高い評価を得た。(2)は文献史学・考古学・美術史学など多方面から対馬を論じたもので、なかでもガラスや砥石といったこれまで注目されてこなかった技術的な視点を取り込んだことに独創性がある。多角的に中世対馬を論じた論考として『史学雑誌』123-5で高く評価された。また(3)は消費遺跡からは出土しにくい鉄鍋を、生産遺跡に残る鋳型などから追究したもので、鉄鍋を通して中世社会の日常生活用具が浸透していく様子を具体的に論じる方法を示した。同様に『史学雑誌』123-5にて紹介されている。  【社会、経済、文化的意義】 研究の成果を一般社会に広く紹介した企画展示である(1)は、NHK日曜美術館アートシーンなどテレビや新聞・雑誌でも取り上げられ、さらに広島県立歴史博物館にて巡回展を開催した(2013年9～11月)。また地域の伝統技術を映像として記録し社会に公開するために企画展示と連動して開催した歴博映像フォーラム「石を切る—採石技術の伝統と革新—」は多くの関心と呼び、翌2014年3月にアンコール上映会を行った。さらに歴博フォーラム「モノ作りの中世」や講演会等も開催した。	○
				(2)	佐伯弘次編	『中世の対馬』	勉誠出版		325頁		2014					
				(3)	村木二郎	『中世鑄造遺跡からみた鉄鍋生産』	『考古学の中世史研究』高志書院	11	pp.181-202		2014					

業績番号	細目番号	細目名	研究テーマ及び 要旨【200字以内】	代表的な研究成果 【最大3つまで】								学術的意義	社会、経済、文化的意義	判断根拠(第三者による評価結果や客観的指標等) 【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等
				a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)						
				著者・発表者等	タイトル	発表雑誌・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI (付与されている場合)						
7	3302	日本史	<p>基盤研究「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」</p> <p>本研究は、科研基盤研究(B)とも連動して、現存最古の洛中洛外図屏風でありながら研究が盛んでなかった「歴博甲本」について、歴史・美術・考古・情報・有職といった幅広い分野の研究者と共に研究を進め、作者・制作目的・制作年度などの基本的な情報から、描かれた事物の解釈に至るまで、総合的な見解を提示した。その研究は、美術史のみならず、政治史、社会史など多くの分野に影響をおよぼし、新たな課題を生み出した。</p>	(1) 小島道裕代表	連携展示「都市を描く—京都と江戸—」	国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館				2012.3.27～5.6 (国文学研究資料館は3.28～)		S	<p>【社会、経済、文化的意義】</p> <p>これまでに基本的研究が行われていない洛中洛外図屏風歴博甲本を共同研究により総合的に検討し(査読付論文10本からなる研究成果報告書(2)として公表)、その成果を国文学研究資料館との連携による(1)連携展示、また(3)一般を対象とした雑誌で広く社会に公開した。(1)はNHK等テレビや雑誌でも紹介された。これ以降、洛中洛外図屏風への関心が高まり、京都文化博物館「京を描く—洛中洛外図の時代—」(2015年3～4月)など、展覧会への本館所蔵洛中洛外図屏風の出品が相次いでいる(予定も含め総計14件。韓国国立中央博物館への貸出しも予定)。また本研究の成果をもとに、福井県立朝倉氏遺跡資料館特別展示「一乗谷 戦国城下町の栄華」(2015年9～11月)で「歴博甲本」復元屏風をベースとして戦国大名朝倉氏の城下町一乗谷のかつてのありさまを屏風で表現するコンテンツが制作され、注目を集めた(9月20日付福井新聞)。</p>			
(2) 小島道裕編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第180集	国立歴史民俗博物館		240頁	2014											
(3) 小島道裕編	特集「洛中洛外図」	『歴博』国立歴史民俗博物館	164号	pp.1-23	2011											
8	3305	考古学	<p>基幹研究「農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—」</p> <p>本研究は、紀元前10世紀に水田稲作が始まる弥生時代とはどのような時代であったのかを解明する目的で始まった。海外研究者を含む18名からなる共同研究の結果、水田稲作の急速な増産によって短期間で古墳を成立させたというこれまでの時代観から、なかなか広がらない水田稲作、水田稲作開始後600年経過して現われる青銅器や鉄器など、前半期を中心に低成長であった弥生時代像へと大きく転換させた。</p>	(1) 藤尾慎一郎代表	企画展示「弥生ってなに?！」	国立歴史民俗博物館				2014.7.15～9.15		SS	<p>【学術的意義】</p> <p>本研究の成果を論文集としてまとめた査読付(3)では、前半期を中心に低成長期であった弥生時代像を明らかにし、これまでの弥生時代像を大きく転換させた。所収論文が『日本考古学年報』66(2014年度版)に8頁にわたってテーマごとに取り上げられた。さらに(2)の書評が韓国釜山考古学研究会の雑誌『考古廣場』15(2014年)に掲載された他、『日本考古学年報』65(2013年度版)でも大きく取り上げられた。2011年度からの科研基盤研究(B)で実施した韓国古墳出土人骨等100点以上の炭素14年代測定は、日韓考古学の間に存在した古墳時代の年代観のズレ解消に向けての研究へと展開し、弥生時代の炭素14年代測定結果について刊行した『研究報告』第137集が韓国語に翻訳される等、韓国の学界を巻き込んだ研究が進行中である。研究成果を広く社会に可視化した(1)は、同じ考古資料に対する異なる見解を展示に反映させた「論争展示」のスタイルが斬新として『史学雑誌』124-5において(3)と共に極めて高く評価された。展示図録所収図等の転載依頼が館林市市史等から既に7点なされている。</p> <p>【社会、経済、文化的意義】</p> <p>研究の成果は(1)として公開し、8月25日付朝日新聞夕刊署名記事「弥生文化広がり異説」で大きく報道されたのをはじめ、日経・産経・毎日・読売等の新聞に27回にわたり紹介記事が掲載され、『博物館研究』『歴史研究』『学士会会報』等の雑誌やテレビ等でも紹介された。以上の成果を受けて一般向けに刊行された講談社現代新書『弥生時代の歴史』(藤尾慎一郎、2015年)は10月4日付日本経済新聞朝刊、11月15日付赤旗朝刊に書評が掲載され、「通説を覆した…」との見出しで極めて高い評価を受けた。歴博で定型化した、年代測定資料の前処理方法(有機溶媒で洗浄すること)は民間の測定機関にも採用され、より確からしい測定値の獲得に貢献した。</p>			
(2) 藤尾慎一郎	『弥生文化像の新構築』	吉川弘文館		275頁	2013											
(3) 藤尾慎一郎編著	『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集	国立歴史民俗博物館		530頁	2014											
9	3305	考古学	<p>開発型共同研究「縄文時代の人と植物の関係史」</p> <p>本研究は科研若手研究(B)とも連動し、年代測定・木材化石分析・花粉分析・種実遺体の分析・デンプン分析・DNA分析等を融合して、縄文時代の人と植物利用の関係史を生態学的に明らかにすることを目的とした。考古学・植物学・民俗学・年代学・地球化学等それぞれ異なる切り口から縄文時代の森林資源管理や遺跡周辺の人為生態系の広がり、漆や麻など栽培植物の利用、マメの栽培化等、新たな縄文時代像を描くことができた。</p>	(1) 工藤雄一郎編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集	国立歴史民俗博物館		494頁	2014			S	<p>【学術的意義】</p> <p>自然科学と人文科学との協業によって、縄文時代の森林資源管理や、遺跡周辺の人為生態系の広がり等の課題に取り組んだ。その成果が計23本の査読付論文からなる成果報告書(1)であり、縄文時代の植物利用研究の最先端の成果を示すものとして日本植生学会・史学会等国内外関連学会から極めて高い評価を得た。(3)は日本列島最古の漆材の年代測定の研究成果であり、漆文化の起源についての抜本的見直しを迫るものとして、考古学・植物学・漆工芸研究者から注目されている。フォーラムを二度開催し(2012年12月、2015年11月)、その第1回を活字化したものが(2)である。これまでに5500冊を印刷し、研究成果を広く社会に発信した。早稲田大学・國學院大学・学習院女子大学等の教科書として使用される等、大学教育にも貢献した。なお代表者は本研究に関連して日本第四紀2014年大会若手・学生発表賞を受賞した。</p>			
(2) 工藤雄一郎・国立歴史民俗博物館編	『ここまでわかった!縄文人の植物利用』	新泉社		224頁	2014											
(3) 鈴木三男、能城修二、小林和貴、工藤雄一郎、鯉本真友美、網谷克彦	鳥浜貝塚から出土したウルシ材の年代	『植生史研究』	21巻2号	pp.67-71	2012											

業績番号	細目番号	細目名	研究テーマ 及び 要旨【200字以内】	代表的な研究成果 【最大3つまで】							学術的意義	社会的意義 、 経済的意義	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等） 【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、 文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して 選定した 研究業績 番号	共同利用等
				a)	b)	c)	d)	e)	f)	g)					
				著者・発表者等	タイトル	発表雑誌・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI (付与されている場合)					
10	3501	文化人類学・民俗学	<p>基盤研究「高度経済成長期とその前後における葬送墓制の習俗の変化に関する調査研究-「死・葬送・墓制資料集成」の分析と追跡を中心に-」</p> <p>本研究は葬送墓制の変化を1960年代、1990年代、2000年以降と時期区分し、民俗学の変遷論と伝承論とで分析した。特に2000年以降の全国各地の葬送墓制変化の実態調査により、ホール葬と火葬による簡便化が進行し、儀礼の省略と近隣による相互扶助の崩壊が起きていることを分析した。またその変化の中にあって強い伝承力を有する習俗として盆の地域差に注目し、その解読における比較研究法の有効性を明らかにした。</p>	(1) 関沢まゆみ編	『国立歴史民俗博物館研究報告』第191集	国立歴史民俗博物館		577頁	2015			S	<p>【学術的意義】</p> <p>本研究では、葬送墓制の変化を全国各地の民俗伝承の広範な調査収集により具体的に追跡した。2000年以降も対象とすることにより、過去と現在をつなぐ新たな領域を開拓した。(1)は査読付論文等18本を収録した成果報告集。(2)は葬儀の担い手の血縁から地縁そして無縁への変遷、また17C後半に作られた村ごとの相互扶助による葬儀システムの崩壊を論じた点が注目され、雑誌『日本歴史』に紹介された。(3)は近年の戦後民俗学の認識論批判論争と共同研究の成果に基づいて作成した映像フォーラム記録。九州南部と東北部との盆行事の共通性に注目して比較研究法の有効性を改めて示し、また技術の変化が死穢忌避観念や意識を変えていく様子を明らかにした。『國學院雑誌』掲載論文に引用され、また墓地飲食の習俗に注目したマスコミの取材もあった。フォーラムは多くの人々の関心を集め、アンコール上映会が開催された。</p>		○
	(2) 新谷尚紀	『葬式は誰がするのかー葬儀の変遷史ー』	吉川弘文館		206頁	2015									
	(3) 関沢まゆみ・国立歴史民俗博物館編	『盆行事と葬送墓制』	吉川弘文館		251頁	2015									